

【時代祭】 平安京遷都(794年；延暦13年10月22日)を祝い、明治28年の遷都千百年記念祭の一環で始まりました。御所～平安神宮間の行列の先頭は**維新勤皇隊**(旧名**山国隊**)、錦旗を携え、鼓笛軍楽も勇ましい時代行列の名物です。行列は明治に始まり時代を遡る形(倒叙形式)ですが、それは大正2年(1913)の変更以降のことで、当初は現在とは逆の順でした。その後も行列内容の変更が適宜行われていますが、山国隊の先陣だけは初回から一度も変わってはおりません。

ところで、記念祭の準備段階では山国隊の列は計画にありませんでした。実は、主催者側の公募に応じて山国村から参加を申し出たのであり、また、それだけの理由があったのです。

京北町 来年4月には京都市右京区に編入される予定の地域ですが、地理的な条件も手伝って独特の歴史を有しています。昔の国名では**丹波国山国庄**、平安京遷都[桓武天皇]の時に山国庄は**御杣**として木材を供給する皇室領となりました。木材の他にも、**粽**・餅・若菜・鮎・茶・釣瓶・柄杓・盥・桶といった地域特産品を朝廷に献上していたようですね。

応仁文明の乱の際は、皇室の物品が戦火を避けて山国庄に運び込まれたこともあります。さらには、建武新政の時は、北朝の光厳天皇が京都を逃れて、大雄山**常照寺**(現・常照皇寺)を御在所とされるなど、古くから皇室との深いつながりを持つ土地柄です。

当地域の状況が一変したのは秀吉の時代でした。検地により名主層が管理した神領・私領が没収され、私領は小作人らに分与されることになったのです。つまり、古い秩序が崩壊し始めたというわけです。

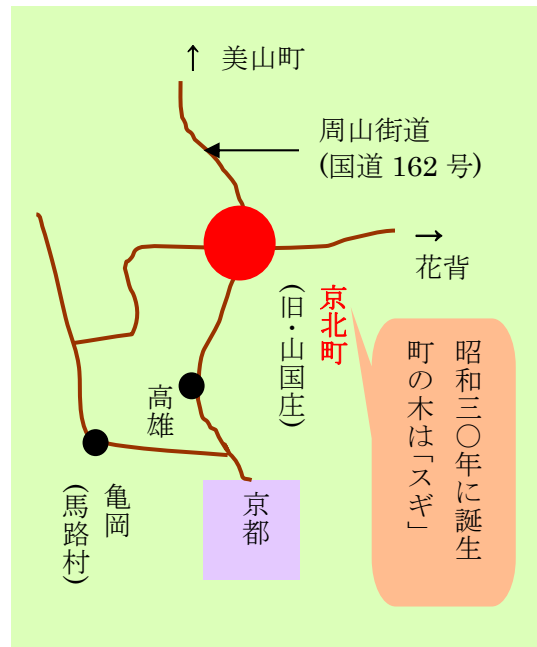
江戸期に入ると山国庄は皇室領から分断されて、宝永年間(1704～1710)以降は、**皇室領・梶井門跡領(天台宗)・旗本杉浦氏領**の三つが並存となりました。その結果、山の用益・皇室への献上品・年貢率の違い、さらには五社明神の神事のあり方をめぐって、微妙な利害衝突が起きるようになったのです。

幕末頃には旧来の名主層と台頭した富農層との間で主導権争いが避け難くなり、大局としては、名主層が江戸期以前の秩序を取り戻したいと願っていたのが山国庄(村)の姿であったようです。

徳川幕府から大政が奉還された明治維新时期は、この名主層にとって絶好の機会でありました。維新政府は徳川残存勢力を一掃すべく、各方面へ治安維持のための鎮撫隊(官軍)を派遣しますが、山国村の名主層は恭順するだけに終らず、**山国隊**を組織して鎮撫隊への従軍を志願したのです。この行動は、より積極的な姿勢を示すことで永年の由緒と格式を認めてもらい、伝統的な秩序を

取り戻そうとの狙いがあります。尚、**馬路村(現・亀岡市)の弓箭隊**も有名な志願兵でした。

余談ながら、丹波山国村、同馬路村、そして大和十津川村の3村は「**日本制外三カ所**」と言われるほどの特異な村だったようです。伝統的に勤皇の志が篤く、幕府の規制を受けない歴史を持っていたということが共通点でしょうか。十津川村なども歴史の節目でよく登場する土地ですね。



山国隊の従軍の履歴を追ってみますと、越後ならびに箱館戦争こそ参陣していませんが、ほぼ戊辰戦争全般に関わっていることが分かります。近藤勇の最後の戦もありました。

慶応4年(1868)	1月 5日	西園寺公望の檄文に呼応して山国村の名主層が一隊を編成 藤野 ^{いつき} 齋・水口市之進・鳥居専学・河原林安左衛門ら83名
	1月11日	山国神社で出陣式 官軍の東征に参加(因幡鳥取藩に從属) 藤野齋ら35名が東征に随軍 残りは京都留守隊(水口ほか)
	1月18日	岩倉具視より「山国隊」と命名される
	2月13日	京都御所を出発……東征大総督は有栖川宮熾仁親王 山国隊の隊長は因幡鳥取藩士、隊中取締役は藤野齋
	3月 6日	甲州勝沼で初陣 近藤勇らの甲陽鎮撫隊と交戦
	3月14日	江戸に帰着 あらためてフランス式訓練と軍楽教育を受ける
	4月22日	下野国壬生・安塚の戦……戦死2名・重軽傷4名 (→ 後に山国護国神社の祭礼日となる)
	5月15日	上野東叡山彰義隊との戦……戦死1名・負傷4名
	以降	奥州戦線に参陣
明治元年(1868)	1月25日	京都凱旋……閏月を含め10ヵ月振り 35名の出征 戦死4名 病死2名 重軽傷者若干名 尚、翌年2月になって、1名は高熱が元で死亡 借金の返済……因幡藩には996両・年内に500両を返済 総借財額は7,800両・4,400両は返済、3,400両が残る
明治2年(1869)	2月18日	山国村へ帰郷凱旋……1年と1ヵ月振り
	2月25日	山国神社で招魂祭を行う(死亡7名の鎮魂)

9月8日に
明治と改元

以上で明らかなように、山国隊は正規兵ではなく、因幡鳥取藩に從属する形で参陣しました。そのために、何と彼ら自身の出兵費用は自弁(自己負担)だったのです。従って、因幡鳥取藩にも必要の都度借金をしましたし、京都に残った水口らは多方面に金策をして賄っていた次第です。明治2年の凱旋帰郷は晴れがましいものではありませんでしたが、その一方、借財の返済という苦勞が山国村の11ヵ村に重くのしかかることになり、つまり戦後も山国村は闘っていたわけです。

藤野齋の八面六臂の活躍と内部調整能力が無ければ、山国隊は空中分解したかも知れません。一つは上記の借財問題で、さらに想像以上に大きかったのが名主層と從士層との対立問題です。從士層は、家格の違いから待遇面や職務分担において名主層よりも一段低い位置に置かれました。しかし、この従軍に際しては平等な扱いを要求したのです。指揮命令権が因幡鳥取藩にある以上、当然なことでもあり、無用の差別は隊の統率を乱しかねません。藤野も結局は「盟書」をしたため、差別撤廃を約束しましたが、このことが後には山国村で新たな火種となったわけです。

ところで、山国村の名主層の気概と申しますか、激烈振りはその8年後にも現われたのです。明治10(1877)年2月に西南戦争が勃発した時のことですが、旧山国隊員やその兄弟25名が、時の京都府知事・植村に対して出兵を志願しております。但し、この時は却下されました。

山国隊にまつわる話題

藤野斎は故郷に妻を残していましたが、北野上七軒の芸妓(牧野やな)との恋愛もありました。二人の間には2男1女が生まれ、次男末子が「日本映画の父」と呼ばれた牧野省三です。行動力とアイデアによって日本映画の礎を築いた人物ですね。藤野同様に人を率いる資質を持っていたということでしょうか。因みに、省三は昭和15年6月に東京劇場で「明治山国隊」を上演しますが、映画化そのものはついに実現しなかったそうです。尚、省三の子である雅弘・光雄も映画製作者、監督となっています。省三の妻・ため(知世)は、千本三条に近い銘木店「石橋屋」(多田家)の娘で、平安女学院を卒業したばかりのうら若き乙女でした。省三の一目惚れであったとのこと。

因幡鳥取藩主・池田慶徳は水戸の徳川斉昭の五男で、徳川慶喜とは異母兄弟の関係になります。戊辰戦争では兄弟で敵対することを避けるため辞官・退隠を申し出たのですが、山陰道鎮撫隊の総督・西園寺公望に慰留されて新政府側につきました。どういう説得をしたのでしょうか？

うまじ 馬路村(現・亀岡市)のきゅうせん 弓箭隊についても少し触れましょう。中核の人物は郷士(名主)である人見龍之進と中川禄左衛門です。彼らは山陰道鎮撫隊に従軍したのですが、進路に当たる諸藩が予想に反して抵抗せず帰順したことで、戦いに巻き込まれることもなく無事に帰郷できました。山国隊とはまことに対照的な結末ですね。尚、この時の西園寺総督と禄左衛門との出会いが縁で、禄左衛門の長男(小十郎)が東京帝国大学卒業後に西園寺(文相や首相を歴任)に仕えることとなり、後年に立命館大学の創設につながりました。小十郎は立命館大学の総長になった人物です。

時代祭と山国隊

神泉苑の少し南に「二条陣屋」(小川家)があり、ここは藩邸を持たない地方大名らが上洛した際に本陣を構えた所でした。小川家は両替商や薬種商を営む富商で、片や旅館業も兼ねていたのです。山国隊も時代祭になると当所へ宿泊し、玄関先に「丹波山国隊」の幟がはためいていたそうです。

山国村が遷都千百年記念祭参加を名乗り出た理由もむべなるかなと思いますが、実はこの時も衣裳新調・旅費宿泊費などの大半が自己負担でした。平安講社(官民挙げての実行組織体)からの補助ではとても賄い切れません。それが障害となって、明治35年以降は5年毎の参加となり、大正8年を最後に山国村からの参加は中止に至りました。翌年以降は当年に京都市に編入された壬生朱雀地区の人々が代役を務めることで継承されています。この地区には丹波山国村出身者が多く住まわれたらしく、確かに材木商や銘木店が多い地域ではありますね。

「明治は遠くなりにはけり……」、言葉と同様に、山国隊も遠い過去の存在になるのでしょうか。平成7年(1995)の遷都千二百年記念祭においても、この山国隊を特別招待したというような話を聞いた覚えはありません。叶うことであれば、今回の京北町が市内編入ということのを機会に、時代祭の中でそのような配慮を望みたいものです。